

安政 六（二八五九）

一月二十八日、平部豊・小野正平が句読師を免じられ、荒武増蔵・長倉徳助が句読師に任ぜられた。郡司九八郎・米良幸一郎・右松徳治・木脇徳助が主事に任ぜられた（『饗舎永観』）。

万延 一（二八六〇）

長倉処平（後の小倉処平）が振徳堂を卒業（岡本氏作成「小倉処平年譜」）

文久 一（二八六一）

五月四日、長倉処平が振徳堂書記に任じられる（『饗舎永観』）。

文久 二（二八六二）

一月十一日、長倉処平（後の小倉処平）が振徳堂書記から主事に任じられ、翌年十二月二十八日まで勤めた（『饗舎永観』）。

文久 三（二八六三）

十八歳の長倉処平が小野九十九の婿養子となり、小野家を相続、問もなく小倉姓に改姓した（『小村寿太郎』黒木勇吉）。

十二月二十八日、守永勝右衛門・松浦源三郎・野田得三・守永守が句読師を免じられた。川崎孝三郎・沼津啓蔵・稻沢泰三郎が主事を免ぜられ句読師に任ぜられた。長倉処平（後の小倉処平）が振徳堂主事を免じられる（『饗舎永観』）。

元治 一（二八六四）

小倉処平が藩用で京都に使いた（『小村外交史・上』10p）九月十八日、小倉処平が振徳堂句読師に任ぜられた（『饗舎永観』）。

六月二十五日小倉処平が世情を調査するため飢肥を発ち鶴崎・宇佐（大分県）に向う（『嶮南日誌』）七月、宇佐から小倉処平が出した報告書が飢肥に届く。長州戦争の状況を報告した（『嶮南日誌』）。

慶応 三（二八六七）

七月三十日、平部嶮南の妻やさが死去した（『六鄰莊日誌』）。やさは長倉善助娘、長倉訥と小倉処平の叔母（『南那珂医師会史』・『六鄰莊日誌』）。

八月六日夜、小倉処平が小倉より帰る。八月一日、藩が再び小倉処平を小倉に向かわせ、九月十九日夜、処平が帰藩し翌日、藩主に小倉の様子を報告した（『嶮南日誌』）。

二月一日、小倉処平が振徳堂の句読師を辞する（『饗舎永観』）。

二月、米沢藩の雲井龍雄が京都で幕府方の諸藩と交流していた。この頃、雲井と交友していた飢肥藩士には長倉徳介（徳助）・関所平（小倉処平の誤写か）・山田一郎次・甲村休五らがいた（『雲井龍雄全傳上巻』）。

三月二十七日、藩命による遊学のため小倉処平が油津から乗船、江戸に向かう（『嶮南日誌』）。

五月、小倉処平が江戸で安井息軒の三計塾に入門した（『安井息軒先生』若山甲蔵）

九月、小倉処平の娘が夭折した（『嶮南日誌』）。

明治 一（二八六八）

二月十三日、鶴崎（大分）の小倉処平から書状が飢肥に届く（大阪から鶴崎にきていた）（『嶮南日誌』）。

二月十五日、処平が新政府の長崎鎮撫使と同じ船に乗船して長崎に着く（『嶮南日誌』）。

この時、処平は飢肥藩の長崎留守居を命ぜられた。（『自然の人小村寿太郎』）。

二月二十七日、長崎の小倉処平から手紙が  
飢肥に届いた（『嶺南日誌』）。

閏四月、「長崎裁判所が九州の旧幕府領を  
管轄するが当分の間は引き続き各藩に統治  
を委任するように」という内容の手紙が飢  
肥藩に出された。処平が出したものか（『阿  
萬文書』）。

六月、長崎の小倉処平が飢肥に手紙を送る。  
「旧幕府領の統治については長崎裁判所と  
連絡を取り合うよう」伝える（『阿萬文書』）  
五月六日、小村寿太郎が小倉処平と守永弥  
六に従って長崎へ向かう（『小村外交史・  
上』11p）

月日不詳、小倉処平らは長崎にしばらく滞  
在した後、小村寿太郎を連れて長崎から東  
京に向かう。上京直後、熱病に襲われた寿  
太郎を、小倉は浅田宗伯を招き日夜看護に  
あたった（『骨肉』）。処平は大学南校に入  
り間もなく寮長に抜擢され、ついで大学権  
大丞（文部権大丞）となった（『小村寿太  
郎』黒木勇吉）

明治三年七月、小倉処平は大学南校の校風  
改善を献策、同志らと貢進生制度を建議し  
て、採用されることとなった小村寿太郎  
は小倉の推挙により、飢肥藩の貢進生とし  
て大学南校に入学した（『小村寿太郎』黒  
木勇吉・『骨肉』）。

『大学々生溯源』によると、「小倉（処平）  
と平田東助（米沢出身）が、貢進生制度建

## 明治 二（一八六九）

## 明治 三（一八七〇）

## 明治四（一八七二）

議の結果として大阪洋学校を改革しに行っ  
た時」「長谷川は大阪にて初めて小倉の為  
に知られた」とあるが、中村菊男著の『星  
亨』には「その年（明治二年）の七月、政  
府は中島水元を校長とし、小倉処平・平田  
東助両名を舎長として、東京から派遣して  
きた」とあるがこれは明治三年の誤りであ  
る。

十二月九日、太政官弁官から大学へ、大学  
出仕権少丞准席の小倉処平へ留学が命じら  
れた（国立公文書館所蔵）

十二月十九日、太政官弁官から大学へ、小  
倉処平から願ひ出ていた飢肥への帰省を許  
可すると伝達依頼書が出された（国立公文  
書館所蔵）

明治三年頃の大学南校の舎長には井上毅（熊  
本出身文部大臣）・小倉処平・九鬼隆一（帝  
国博物館初代総長・岡倉天心のパトロン）・  
浜尾新（東大総長・貴族院議員・文相）・  
出浦力雄（翻訳家）がいた（小村外交史上  
14p・斉藤修一郎の晩年の話より）寮長に  
抜擢され、ついで大学権大丞となった（『小  
村寿太郎』33p 黒木勇吉）

十二月留学派遣者として権少丞准席・小倉  
処平と大舎長・丹羽龍之助がドイツへ学制  
取り調べのため派遣された（東大帝国大学  
五十年史）

三月十九日、小倉処平がニューヨークから  
出港してイギリスに向かう（『小村寿太郎』

黒木勇吉48 p) イギリス行きは「学制取調の官命を帯びて英国に赴き」と『小村外交史上22 p』(外務省編纂)にある。枡本卯平の『自然の人小村寿太郎』は「英仏二国において政治経済を修めた」とある。四月一日、小倉処平がニューヨークからイギリスに着く(『小村寿太郎』黒木勇吉48 p)

四月、小倉処平はイギリス・フランスに留学して政治経済を修めた(『小村寿太郎』黒木勇吉)。思想の感化を大いに受ける(『骨肉』)。香月経五郎(江藤新平の側近)も処平と同じく留学する。2人は留学生中の巨擘と称せられた(『宮崎縣大観』)

四年七月十八日、教育行政官庁としての大学を廃止して文部省が設置された。江藤新平が初の文部大輔に任命された。

五月二十四日(日本では四月四日)付けで小倉処平が父長倉喜太郎・兄長倉訥・弟長倉雄平にあてイギリスのロンドンから手紙を發する。「東京の政局が不安定で心配する。兄訥へ、まंनीちの場合は、隣国(鹿兒島?)を信用して協力し、世間に飢肥の武名をとどろかせるよう」伝えている(『小村寿太郎』黒木勇吉48 p)

明治五年七月二十八日付けで次の留學生が都城県飢肥出張所から同県庁へ報告されている。小倉処平が英国留学。杵岐宗淳が長崎病院入学。米良雄平が東京慶応義塾入学。

明治五(一八七二)

明治六(一八七二)

明治七(一八七四)

小村寿太郎が大学南校貢進生(『都城市史』131 p)

七月、小倉処平の実弟長倉雄平が文部省督学局に勤める(『宮崎縣大観』)

六年、ロンドン滞在中の小倉処平が写真を撮影した(『自然の人小村寿太郎』51 p)

一月七日付で、帰国した文部権大丞の小倉処平が、英国へ留学した際、税制について研究したことや出發から帰国までの日程を報告した「届け出文書」を県東京出張所に提出した(宮日平成十九年六月二十二日)。

留学の間、「英国租税年表」「英国地方条例」「支那水路誌」等を訳述している(『小村寿太郎』黒木勇吉)。枡本卯平「自然の人小村寿太郎」によると「三年の間、英仏二国に於て政治・経済を修め盛なる自由主義者の一人であった」

一月十日付で、帰国した文部権大丞の小倉処平が、親を見舞うために飢肥に帰省することを願ひ出た「口上覚」とその帰省費用の負担を国に求めた「依頼願」を県東京出張所に提出した(宮日平成十九年六月二十二日)

二月六日、小倉処平がイギリス留学から帰国して飢肥に帰る(『六鄰莊日誌』)。嶮南が長倉家を訪ねたところ。小倉処平を向かえに人をこの日晝に鹿兒島へ出したという。処平が帰県した(『嶮南日誌』)

二月九日、長倉訥・小倉処平兄弟が平部嶮